

京劇《駱駝祥子》について

津田 忠彦

らくだのシアンズ 二幕六場 字幕あり

駱駝祥子

現代京劇

今年(2002年)1月25日、中国の「光明日報」はほぼ全面を使って京劇《駱駝祥子》のことを報じ、中国伝統劇界の最高の栄誉といわれる「中国戯曲学会賞」受賞を伝えている。文革以降の伝統劇上演の金字塔と評価された89年上海京劇院の《曹操と楊修》・93年浙江小百花越劇団の《西廂記》に次ぐ久しぶりの受賞作品となった。

中国政府が「京劇の改革」を唱えて久しいが、若手優秀俳優の再養成や隔年で行なう政府主催の「中国京劇芸術祭」も回を重ね、第3回が昨年末に終了している。

この京劇芸術祭の第2回(99年)で金賞を射止めたのがこの《駱駝祥子》である。現代劇の京劇化、京劇の現代劇創作という難題に挑戦し、信じがたい成功を取めた。「光明日報」は「長年待ち望まれた快挙!」と報じている。

伝統劇では主人公になれるはずのない、無知で善良で社会の最下層を生きる“小人物”祥子がかくも生き生きと描き出され、老舎文学の香りと思想を損なうことなく、京劇の優れた特性をドラマの中に溶け込ませるといえる驚くべき成果を上げている。

この作品に登場する俳優の演技は全てが京劇の演技術に裏付けされており、無口な祥子の心理の裏が「唱」によって余す所なく表現され、人力車を引く動作の舞踊化された創作的仕草は、リアルリズムでは到底不可能な劇的感動を呼ぶ。

甘肅省京劇院団長であった主役の陳霖蒼氏の発案を取り上げた江蘇省京劇院の院長高舜英女史は自ら総監督を務め、京劇芸術祭で金賞を射止めて以来、実に80回を超える公演を成功に導いたのである。中国京劇界が待ち望んだ名プロデューサーの出現といえるだろう。彼女は、江蘇省京劇院院長の席に昨年5月、陳霖蒼氏を据えている。

◆ あらすじ

1920年代、北平(北京)。祥子は郊外の貧しい農村に生まれ、18才で父母と土地を失い単身北平に出て車引きになる。祥子はひたむきに働いた——自分の人力車を手に入れるために。一杯のお茶も口にせず、周囲からの誘惑にも負けず、やっと一台の人力車を手にした祥子は内戦のどさくさで敗走の軍隊に捕えられ、車を奪われる。軍が放置した三頭の駱駝をひいて命からがら北京に逃げ帰ったことから駱駝の祥子と呼ばれるようになった。

意気消沈の祥子だったがまたお金をためて車を買おうと努力する。しかし世の中は祥子の思い通りにはいかない。無実の罪を着せられ、法外な賄賂を払わされ、真実の愛に触れようとするが死なれてしまう。

祥子の思いとは全くうらはらに不幸な人生が過ぎていき、まじめで優しく、負けず嫌いだっただ祥子は人力車も希望も失い、街の景色に埋もれていく——



祥子 役

チェンリンツァン
陳霖蒼 Chen Lincang

梨子花臉
国家一級俳優
中国戯曲家協会理事
江蘇省京劇院院長
文化部「文革演技賞」
中国戯劇「梅花賞」受賞者



虎妞 役

ホワンシャオツ
黄孝慈 Huang Xiaoci

青衣・花旦
国家一級俳優
江蘇省戯劇家協会副主席
中国戯劇家協会会員
中国戯劇「梅花賞」受賞者

* 梨子花臉…しぐさ・台詞を主な表現手段とするエネルギッシュな男性役で
鬚取を飾る役柄

* 青衣…唱を主な表現手段とする落ちついた青年・中年女性の役

* 花旦…しぐさ・台詞を主な表現手段とする
快活な若い女性の役

老 舎

(ろうしゃ) Lao She・1899-1966)

北京の貧しい満州旗人の家庭に生まれる。教学の傍ら1920年代から長短の小説を多く書き始める。「趙子曰」「猫城記」「離婚」「四世同堂」、戯曲「茶館」など。純粋の北京語による諷刺の効いた筆致は中国の近現代文学の中で独特の位置を占めている。文化大革命で迫害死(一説に自殺とも)。